

密着「支援機構」

Interview



ドイツ語フランス語圏言語文化コース
フランス語圏言語文化領域 教授

ふくしま よしゆき

福島 祥行 先生

1983年大阪市立大学文学部入学。1992年大学院文学研究科単位取得退学。1993年文学部助手、2010年大学院文学研究科教授、現在に至る。研究内容は、相互行為論にもとづくコミュニケーション、言語、学習＝教育、社会的レジリエンス創発、および仏語圏学。2002年度教育促進支援機構準備会事務局長、2003～2005年度教育促進支援機構事務局長、2006～2013年度教育促進支援機構事務局長。教育促進支援機構に関わったことで、学びについて深く考え、研究するようになった。

2002年に、文学部50周年記念事業のひとつとして始まった支援機構は、当初、教員がコントロールする機関でした。その目的も、主として学生支援のための資金を集めるためのものと誤解され、当時の文学研究科院生協議会からの反撥を招きました。けっきょく、1年間を試行期間とし、その間に学生主体のものとするよう努力されたのは、初代事務局長(事務局長は、福島と心理学の川邊先生)の塚田先生(日本史)です。

とはいえ、初期の支援機構の活動の大半は、教員主導で進みました。各種企画は、学生(学部生・院生)たちが進行を務めたりはするものの、裏で仕切るのは教員たちなわけです。そんななかで、進路支援は、教育学の添田先生の盡力により、學外講師を呼んで毎月セミナーを開催する活発さが生まれました。また、当時あった第2部(夜間部)の学部生(社会学)のTくんのように、みずから企画の司會を買って出るなど、積極的にコミットしてくれる学生もいました。

ですが、やはり大きな転換となったのは、2006年に、当時の栄原研究科長・学部長(日本史)のアイデアにより、文科省のGP事業(Good practiceの略で、全国の大学の優れた教育的取り組みに1500から2600万円の助成金が出るというもの)に応募するため、企画チームを結成したときです。塚田先生から事務局長を引き継いだばかりのぼくは、栄原先生に、支援機構を主体的に担ってもらうためにも学生をチームに入りたいと申し入れ、認めてもらいました。いまでこそ、色んな公式企画を学生に任せるのはふつうの光景となっていますが、当時としては画期的なことでした。認めてくださった栄原先生の英断といえましょう。このときの呼び掛けに応じてくれた哲学のTくん、国文のNさんは、のちに色んな企画を作り、担ってくれることとなります。残念ながら、このときのGPには落選しましたが、支援機構が、真に学生主導に変わるきっかけとなりました。この年には、学部生のOさんたちから新歓キャンプの企画書が出され、2007年3月に第1回が実現することとなります。この企画は完全に学生たちのあいだで立案・運営され、このときに会議のやり方や議事録のテンプレートなどが、生協の学生スタッフとして学んだOくんによって導入され、以後、支援機構のフォーマットとなって定着しました。

そのつぎの転換点は、やはり2007年のオープンキャンパスでした。すでに、OCにおいて配布される文学部案内冊子を支援機構が請け負うという企画は進行していましたが、当時ぼくのTAをしていたOくんからフリートークがやりたいといわれ、OC内で実施することができました。このときは、冊子のスタッフがそのままOCスタッフも兼任(冊子をつくることで、文学部の内容に通曉できていたので)でしたが、企画スタッフ、当日スタッフなど、現在のイベント系企画の枠組みが同時に完成しています。

そこから15年、この間じつにさまざまなことがありましたが、変わらずいえることは、支援機構は、いつにかかって、学生の学生による学生のためのものであったということ、しかしながら、そこには、教職員との協働があり、対等な立場で——つまり、大きな責任を負いつつも、それに怖ることなく、果敢にじぶんたちの学びを求めて行動しつづけたということでした。これからも、大人たちをうまく使いつつ、スキルはもちろん、精神の継承も忘れずつづけてもらいたいゆえんです。